



多古町にお住まいの「その道」をひた走る方々にお話しを伺ってみると、そこには新しいまちづくりや町を元気にするヒントが…。

いにしえより続く伝統を未来に

——多古のしいかご舞——

毎年7月25日・26日に開催される多古町の夏の風物詩、多古祇園祭の歴史について伺いました。

◎しいかご舞の始まりは

A 始まりは不明ですが、使用されている猿の面の箱書きに、「天明元年（1781年）」の年号があるところから、江戸中期からと推定されています。舞は、氏子三町（本町・新町・仲町）から選ばれた若衆が、猿・獅子・鹿・まんじゅう（雨蛙）などの面をつけ、笛の調子に合わせて、足を踏み鳴らして身振り、手振りです踊る極めて素朴な神楽です。

◎屋台の始まりは

A 新町に保存されている文献に天保3年の文言が残っていることから、近隣のお祭りの影響を

受けて、天保年間には屋台が造られたと考えられます。おそろしく、しいかご舞の賑やかに始まり始めたと思われまます。

◎しいかご舞と天神会

A 当初、新町祭礼を継続する会において、お囃子の保存を目的として活動を開始しました。後に3町の氏子が多数加入するにあたり、新町祭礼を継続する会から分かれて、名称を天王様神楽囃子の会、通称「天神会」を設立しました。しいかご舞の際に笛を奏でる役目を担うのが天神会で、祇園祭とは切っても切れない存在です。

◎現在の活動は

A 設立当初から加入者も徐々に増え、神楽囃子以外に佐原囃子、神輿囃子も勉強し、町のイベントにも多数参加をしています。しかし、コロナ禍を境に、活動場所や参加人数が減少し、現在では存続の危機に陥っています。

《天神会からのメッセージ》

多古町祇園祭、しいかご舞共に、参加者が減少しています。町の伝統あるお祭りを後世まで残すため、少しでも興味のある方は遊びに来てください！



前八坂神社総代 平山一男氏（左）、天神会会長 田中薫氏（右）

~interviewer's eye~



「天明年間より続くしいかご舞」「天保年間より続く屋台の曳き廻し」と約240年近く途絶えたことのない多古の祇園祭。このお祭りに関して町内の先輩方にお話を伺ったところ、戦時中は若い衆が戦地に駆り出されていたため、屋台の曳き廻しはできずにいたが、しいかご舞は神事のため、中止した事が無いと教えていただきました。

私は子どもの頃よりお祭りにかかわっており、お世話になっていますが、お祭りへの参加者と観衆は共に年々減っているように感じます。まち中だけのお祭りではなく、あじさい祭りやいきいきフェスタのように、多古町のお祭りとして広く参加者が集まって歴史あるお祭りを後世に末永く残していきたい文化だと感じました。（伊橋孝太郎委員）